

## 玉川（多摩川）沿いに歩く

### ■ 1 散歩図

## 玉川情景

玉川は、甲州丹波山に発し、北多摩郡で日原川を加え、御嶽山を迂回し、青梅、羽村、登戸、丸子を経て羽田村で江戸湾に注ぐ、江戸西側の大動脈である。上流で、秋川、浅川なども合流し、大河となって滔々と蛇行し、広い川幅に、いくつもの流れの筋を形成し、怒濤の流れとなって江戸湾に到達する。羽村では堰を設け、取水し、江戸市中に飲料水を提供する玉川上水に。江戸の水資源でもある。

## 登戸

江戸時代の玉川の光景を彷彿とさせるのが、雪旦の絵で、江戸側から対岸の登戸、菅生、中之島を描く。背後には、丹沢の山並み、その上に富士山が聳え、右に行くに従って、高尾山、多摩山系、秩父連山が絵のように重なる。この辺りの広い河川敷には、幾条もの水流が蛇行している。中州から投網を投げている人もおれば、釣り糸を垂らす人もいる。岸

辺に近い、やや広い州の上でたき火に当たっている人もいる。つまり玉川は江戸湾に達するまで川魚漁の宝庫であり、漁民がいつも活動していた。特に鮎漁は有名である。江戸時代の玉川はまさに清流である。そして川に沿って土手道が蛇行している。盛り土をして堤防となし、その上が道となっている。玉堤。人々が行き交う。この玉堤を歩いて江戸湾まで広々とした美しい風景を楽しみながら歩こう。

■2 江戸名所図会 雪旦は絵の中央に雲間を描き、右に蛇行する上流の矢野口の渡を書き入れている。

## 駒井村、宿河原 喜多見 江戸氏

右に広大な玉川の河川敷を見ながら、見晴らしの良い玉堤を下流に向かって歩く。振り返ると遠く、大山、丹沢、高尾の峰。そしてその上に霊峰富士が聳えている。登戸を過ぎてもまもなく、駒井村。雪旦はここからも玉川を描く。州から州への橋を渡り、対岸に着くと、そこは宿河原である。此処でも鮎釣りの

長竿を肩に担いだ釣り人。対岸の小高い山の先に、丹沢の峰。一番左の大山が描かれている。絵には無いが、駒井村から手前には、喜多見、狛江村がある。ここは江戸氏の末裔、喜多見氏の領地であった。

玉川の近辺には、古墳が多く、豊かな漁を反映し豪族が古代より棲みついていたことを物語っている。古くから武蔵の豪族として名高い秩父氏。平安時代の当主は秩父重綱。その息子が重継で平安末期、武蔵国江戸郷を相続する。そして江戸四郎と称し、江戸氏を興す。江戸桜田の高台に居館を構える（江戸城二の丸地）。当時は眼下に波が押し寄せている。重継は頼朝に従い、奥州征伐にも従軍している。時代を経て江戸氏は豊臣に滅ばされ、また家康に救われ、喜多見に領地を移封。名も喜多見と改める。江戸とは湾の入り口の意味で、平安末期に武蔵で全盛を誇った江戸氏が江戸地名の起源となる。

■ 3 江戸名所図会 左下駒井村、対岸は宿河原、右上遠くに大山が聳える。

## 玉川の渡し

江戸時代の玉川には橋がなく、船による「渡し」が東西に行き交う人々の橋のようなもの。このため上流から登戸の渡しまで、すでに二十九もの渡しがある。さらに登戸から下流に向かって二つ目の渡しが二子の渡し（新二子橋）である。これは大山道（相州街道）とつながる渡し。江戸時代隆盛を極めた大山詣での旅人達は、赤坂、青山、池尻、三軒茶屋を通り、この渡しを船で渡る。

さらに玉堤を下流に向かって歩く。すると野毛の渡し（多摩川橋）、等々力の渡し（第三京浜）。そして丸子の渡し（丸子橋）に出る。この渡しは、中原街道を歩いてきた人々が対岸に行くための渡しである。中原街道は江戸でも重要な存在で洗足池の縁を通り、江戸市中へと繋がっている。次が平間の渡しで（ガス橋）、池上道（平間街道）に直結する。そのちよつと下流に矢口渡がある（多摩川大橋、第二京浜、古鎌倉道）。これらの渡しは、

いずれも大正から昭和まで活動していた。旅人は皆、船に乗って往還していたのである。

## 矢口の渡し 新田神社

矢口の渡しは、今の第二京浜と川崎を結ぶところにある。ここで玉堤から降り、江戸に向かつてちよつと歩く。左に折れ、しばらく歩くと新田神社がある。そこは池上道に面している。創建は一三五八年。新田義貞の子、義興を奉る。この年、新田義興は矢口の渡しで謀殺されたのである。彼は、足利尊氏の死去に好機到来と兵を挙げ鎌倉に向かわんとする。ところが尊氏の子、鎌倉の基氏と関東管領畠山が送り込んだ江戸高重と竹沢右京亮によつて矢口の渡しで謀殺される。これで新田の血筋は絶えたわけだが、二十八歳で横死した義興の霊を慰めるために地元民が新田大明神として奉ったのである。この頃、玉川は大きく東に迂回しており、矢口の渡し場は、この新田神社のすぐ西側にあつた。時代は変わつて、玉川の流れの変化に伴い、江戸時代

には、渡しの位置が現在の多摩川大橋のところに変わったのである。広い境内の社殿右側に、樹齢七百年のご神木「櫨」が立ち、緑豊かな神社。本殿前の狛犬は「唸る狛犬」。畠山一族縁の者が来ると、うなり声を発したという。瀟洒な本殿裏には約十五メートルの円古墳があり、これは義興の遺骸を埋めた墓といわれている。江戸後期に矢口の渡しが一躍有名になったのは、平賀源内が「神霊矢口の渡し」を書き、歌舞伎の当たりものになったためである。源内はここで「ふたたび御矢、手にはいるからには、官軍を集め、朝敵を亡くして父上の恨みを散ぜん。代々伝わるこの御矢、我が家の武運長久の守り…」と書いた。そして神社の竹を切り、破魔矢として売り出したのである。今日至る所の神社の初詣で手にする破魔矢の風習は、ここから始まった。こうしたこともあって、江戸っ子はこぞって新田神社に参拝したのである。

再び玉堤を歩いて下流に向かう。まもなく

小向の渡しがあつて、次が六郷の渡し（六郷橋）である。これは東海道に直結する。大石内蔵助も川崎宿で泊まり、この渡しを船で渡つて、江戸に入った。雪旦の六郷渡し場の光景は、当時の状況をリアルに伝えている。船が横付けにされ、町民、武士様々な身なりの人が乗り込んでいる。おうい、待つてくれと叫びながら船に向かって走る人。馬から荷を下ろし、家来に指図している武士。葦簣張りの小屋で悠然とくつろぐ人。対岸には川崎村の家が並んでいる。

■ 4 江戸名所図会 「六郷渡場」

江戸湾河口近くの羽田村に入ると、大師の渡しがある。明治二十九年の開業。そして最後が羽田の渡しである。これは、大師の渡し（大師橋、第一京浜）といくらも変わらぬ位置にある。この渡しも川崎大師への参拝客が引きも切らずに利用した。船で渡ると川崎大師河原。ちよつと西へいけんじに行くと川崎大師。正式には真言宗大本山平間寺。十一代將軍家斉が



厄除けに訪れたことから、厄除け大師として、初詣での参拝客で大変な賑わいとなる。今日、初詣に約三百万人が訪れる。

この羽田の渡しから江戸湾に向かって描いたのが広重の「はねたのわたし弁天の社」である。船頭が船縁に足をかけ、櫓をこいている。江戸湾に向かって左上に鳥居があり、弁天様が立っている。羽田の弁天様（今日、羽田空港の西端）。その先には常夜灯が立つ（灯台）。遠くに帆掛け船が見える。船頭の手と足から拡がる江戸湾の構図。この遠近法の大胆な構図がフランス印象派のロートレックに多大な影響を与えた。ここから浦賀や房総の山々が絵のように見えたそうである。今日では想像もつかぬ光景である。

■5 広重 「はねたのわたし弁天の社」 渡し船を漕ぐ、船頭の腕と足の間から望む江戸湾。左中央に羽田弁天の社。海に向かって常夜灯があり、夜間灯台の役割を果たす。

再び六郷の渡しの処に戻って、東海道を南品川宿に向かって歩く。途中、蒲田、大森を



抜けて、東海道は海縁に出る。鈴ヶ森刑場を左に見てちよつと行くと南品川宿である。この海岸縁が鮫洲海岸。海苔の栽培が盛んでここで獲れた豊富な海苔が乾海苔に加工され、浅草海苔として売られ、人気を集めた。江戸湾に流れ込む、玉川、目黒川、立会川、呑川の清流が最適な海苔漁場を造ったのである。広重は東へと回り込む東海道から品川に向かつて海苔栽培の現場を描いている。左側が鮫洲海岸で遙か前方に筑波山が聳えている。鳥や船の一群がいたるところに描かれている。

■6 広重 「南品川鮫洲海岸」

東海道を品川へ、そして池上道を玉川へ戻る。

東海道を品川に向かつて歩く。蒲田、大森。蒲田村から右へ。すると蒲田の梅園がある。蒲田から大森にかけて土質が梅の木に適していた。農民は畑に梅を植え、獲れた梅干しを売る。江戸湾で獲れた海苔と合わせ、江戸市

民が買い求めてくる大森土産。そこに四軒も  
の梅園ができ、四阿屋あずまやや茶屋を配し、憩いの  
場とした（梅屋敷）。この梅園は江戸の名所  
となり、広重もその景観を描いている。文人、  
墨客のみならず、東海道を行く旅人、川崎大  
師へお参りの人、参勤交代の大名達、将軍は  
鷹狩りついでに訪れる。

## 鎧掛け松

東海道を三つの川を渡って（呑川、立会川、  
目黒川）、南品川の宿に着くと、そこから逆  
方向に玉川に向かって行く道がある。これが  
世人曰く、池上道（平間街道）。目黒川を渡  
ると、大井村にでる。道は登りとなっていく。  
登って下ると新井宿。この間に鎧掛け松が聳  
えている。ここから江戸湾を見下ろす。絶景。  
茶屋があり、馬を休め、二丁の駕籠が上がっ  
てくる。江戸湾を眼下に見下ろし、帆掛け船  
を抱いた江戸湾との境に松の木が並ぶ。これ  
が今歩いてきた東海道。坂はその昔、薬研坂  
と呼んでいたがここからの絶景を楽しむ江

戸つ子が増え、見渡しの良さから八景坂と呼ばれるようになった。頂点に聳える一本の松は鎧掛け松。八幡太郎義家が奥州征伐の際、ここで休憩。鎧を脱ぎ、この松にかけた。

■7 広重 「八景坂鎧掛松」

## 池上本門寺

坂は下つたり登つたり。やがて右側に池上本門寺の壮大な寺領が見えてくる。左を見ると呑川が流れ、そこからは迫り上がった台地である。日蓮宗の大本山。一二八二年日蓮はこの地の池上邸で没する。江戸期に徳川家との密接な関係が築かれ、関東有数の巨刹となる。池上道を右に曲がると左右は住家が密集している門前町。呑川を渡る橋の左に南無妙法蓮華経のお題目が深く刻まれた大石塔が建っている（参詣客の目印）。橋を渡って参道へ。左右は塔頭が建ち並び総門へ。これは元禄に建てられ、上に掲げられている扁額の文字は熱心な法華経信者本阿弥光悦の書。光悦は名筆家であるとともに当代随一の陶芸

家、刀の鑑定家。光悦の茶椀は今もって凌駕できぬ逸品とされている。まさに簡素で洗練された雅の極地。この国宝は今、三井記念館で見ることが出来る。門を潜ると本門寺名物の急で長い石段が続く。これは加藤清正の造営。登り切ると広い境内に出る。仁王門が聳え、左側に鐘楼（清正の娘で紀伊徳川頼宣の妻の寄進）、正面に祖師堂（大堂、一六〇六加藤清正建立）。祖師堂の左手前の靈宝殿の裏には加藤清正の供養塔、本門寺最大級の宝篋印塔である（頼宣の正室、清正の娘あま姫の建立）。祖師堂の左に釈迦堂がある。その先には経蔵があり（一七八四建立）、興味深いことに天海僧正による一切経五千巻も納められている。そして祖師堂の背後に、低い扉が巡らされた本殿（社務所）の庫裏が並ぶ（現在釈迦堂が本殿に移転）。その背後、当山で最も高い位置に日蓮聖人の御灰骨を奉安する御廟所がある。また、本殿の右側には松涛園があり、池泉の湧き水池を中心に見事な庭園

があるが、これは小堀遠州が作庭したものである。

入り口に戻って、今度は、仁王門右手の参道を行くと、奥深くに五重塔が聳える。高さ二十九メートル。二代秀忠の乳母正心院が秀忠病氣治癒のお礼に建てた国の重要文化財。この荘厳な総門、五重塔ともに戦災を免れ、江戸の趣をそのまま伝えている。そして五重塔の近くには、大名家の層塔、墓所が点在している。まず、前田利家側室寿福院（本名千代保）の十一層の層塔、近くに加藤清正室の層塔、細川家の墓所、奥平家の墓所、池田家の墓所、細川家・上杉家の墓所、徳川吉宗側室の墓、高松・松平家の墓。

釈迦堂のちよつと先を左に曲がって長い石段を下りる。大坊坂。半分まで降りて右に入ると、立派な宝塔が建っている。巨大な朱塗りの塔堂。こここそが日蓮が茶毘に付された場所なのである。当初は灰堂という建物であったが一八二八年日蓮の五百五十遠忌にこ

の宝塔が建てられた。宝塔の前に狩野家の墓地がある。南の院。狩野孝信、探幽、尚信といった、幕府お抱えの著名な絵師狩野家歴代の墓である。宝塔から曲がりくねった坂道を上がっていくと広い空間が開け、巨大な墓石が八基並んでいる。一際高く聳える石塔。これが御三家紀州徳川家の墓所である。ここには、家康の側室お万の方（頼宣の生母）、紀州徳川家初代頼宣（家康の子）の正室（加藤清正の娘、あま姫）、八代吉宗の側室などが眠っている。

そして大坊坂の石段を下りきると右手に日蓮聖人茶毘所がある。その左に日蓮も使った井戸。そして池上大坊、本行寺。ここが嘗ての池上公の屋敷で日蓮聖人がご臨終を迎えたところである。

今、本門寺には多くの著名人が眠っている。宝塔近辺には、花柳章太郎、溝口健二など。五重塔側には、幸田露伴、市川雷蔵、松本幸四郎、永田雅一、力道山など。

■ 8 江戸名所図会 本門寺 右下池上道から呑み川を渡って左下総門。

■ 9 江戸名所図会 右長い石段を登ると仁王門。右五重塔。境内をまっすぐ行く  
くと祖師堂、本殿。

本門寺を参拝し、池上道（平間街道）を西に直進するとやがて右側に新田神社が見え、さらに歩くと玉川の平間、矢口の渡しに出る。